研究・調査報告書

分類番号		報告書番号	担当
C-190		21-320	慶應義塾大学　加藤眞三

題名（原題／訳）

Alcohol Use and the Risk of Communicable Diseases
アルコールの使用と感染症のリスク

執筆者

Neo K Morojele[1], Sheela V Shenoi[2 3], Paul A Shuper[4 5 6 7], Ronald Scott Braithwaite[8], Jürgen Rehm[4 5 9 10 11 12 13 14]

掲載誌

Nutrients. 2021 Sep 23;13(10):3317. doi: 10.3390

キーワード	PMID
HIV、アルコール、感染症、肺炎、重症急性呼吸器症候群コロナウイルス２型、結核	34684318

要　旨

近年、アルコールの使用と感染症に関する知見が蓄積されつつある。この論文では、ナラティブレビューの手法を用いて、４つの異なる感染症の発症と治療結果におけるアルコールの役割について論じている。これらの感染症には、これまでの比較リスク評価に含まれていた３つの疾患-ヒト免疫不全ウイルス（HIV）/AIDS、結核、下気道感染症/肺炎-と、最近急速に国際保健上の問題となっている重症急性呼吸器症候群コロナウイルス２（SEARS-CoV-2）が含まれている。アルコールに起因する結核、HIV、肺炎を合わせた2016年の死亡者数は約36万人、失われた障害調整生命年（DALY）は1300万人で、アルコールに起因する結核の死亡者数とDALYが圧倒的に多くなっている。アルコールは、行動学的および生物学的なメカニズムを通じて、HIV、結核、肺炎の発症率の増加や治療成績の悪化と関連しているという強力な証拠がある。予備調査では、大酒飲みとアルコール使用障害のある人は、COVID-19感染と重症化のリスクが高いことが示唆されている。HIVの研究は別として、アルコールに起因する結核、肺炎またはCOVID-19に対処するための介入策を導くことができる研究は限られている。感染症の負担を軽減する手段として、効果的な個人レベルの介入とアルコール管理政策の実施が推奨される。